

「比べる思考」を軸とした国語科の授業づくり

1 本校生徒の現状

本校生徒の学習に関する現状を整理すると、おおむね次のようになる。

- ①本年度の全国調査の正答率は、A問題で、全国平均を3ポイント以上、県平均を2ポイント以上上回っており、B問題の正答率は、全国平均を7ポイント以上、県平均を6ポイント以上上回っている。しかし、A問題・B問題ともに記述式の問題の正答率は高いとはいえない状況である。
- ②授業規律がほぼ定着しており、落ち着いて学習に取り組むことができる。
- ③仲間と話し合うことを好み、分からないことを分からないと素直に表明できる生徒が多い。
- ④音声言語・文字言語ともに、自己の認識や感情を言葉で表出することに対しては苦にしないが、筋道を立てて考え説明することには抵抗感を示すことがある。

このような現状である生徒たちに対して、さらに活用力を向上させていくための取り組みを考えると、まず、私たちは上記の②③に注目し、生徒同士が対話を中心としながら学習を深めていくような授業のゴールイメージを描くことにした。そこで、以下のような視点から授業づくりを見直すこととした。

- ①「聞く・書く・話し合う」等、それぞれの学習活動を明確に区別する学習規律の徹底
- ②コの字型・グループ学習等、多様な学習形態の工夫
- ③「比べる思考」を軸にした授業づくり

①については、さらに質の高い授業規律を徹底させることを期したものである。いかに授業改善や指導法の工夫によって生徒たちの学力が向上したとしても、授業の基盤である授業規律が崩れていったのでは継続的な向上は望めないからである。②は、生徒同士の話し合いをより活性化・深化させるための手立てとしての学習形態の工夫を取り入れたものである。本校においては、大部分の教科の授業においてコの字型の学習形態での授業を実施しているが、学習内容や学級の状況などの状況に柔軟に対応しながら、一斉授業の形態も含めて様々な学習形態での授業を行っている。

次に、本校生徒の課題である「筋道を立てて考え説明する」能力は、思考力・判断力・表現力等の「活用力」の中核をなすものであるととらえて、この能力を育てるための授業像として「比べる思考」を軸とした授業を目指すこととした。「活用力」を高めていくた

めには、根拠をもって筋道を立てて思考し、それを他者に対して表現する場面を多く仕組むことが必要であると考えたのである。そのような思考を行わせる授業の典型として「比べる思考」を軸とした授業づくりを考えていくことにしたのである。

以下、「比べる思考」を軸とした授業の実際について、10月16日（水）に実施した研究授業をもとに紹介する。

2 学習指導案

第3学年 国語科学習指導案

指導者 濱崎 美幸

(1) 単元 いにしえの心と語らう（「君待つと」－万葉・古今・新古今）

(2) 単元構成の意図

①表現を根拠にして読みを構築していくことに難しさを感じている生徒が多い。

「故郷」（魯迅・竹内好訳）の授業でのことである。主人公の「わたし」が「ヤンおばさん」と再会する場面で「ヤンおばさんはどんな人か。」という発問から人物像をとらえ、わたしとの関係について考える授業を行った。このとき、生徒たちはヤンおばさんの外見に注目し「頬骨の出た五十がらみの～」「製図用の脚の細いコンパス～」等の表現から人物像を説明しようとした。これらはその表現が直接「どんな人か。」という問いの答えとなる。しかし、内面に関わって人物像を読ませようとするとき、生徒たちは困ったような表情に変わってしまった。作品中には、彼女の性質を直接言い表した表現はなく、いくつかの言動の表現をつなぎその内面を読みながら人物像を構築していくことになるのだが、このような読み方に多くの生徒たちは難しさを感じたのであろう。

②二首の表現を比較して読むことで、それぞれの特長が際立ってくる短歌である。

山部赤人の「田子の浦ゆ～」(万葉集)は富士山を讃えた長歌に添えられた反歌であるが、新古今集所収の同歌では表現が数か所で異なっている。これは、藤原定家が赤人の短歌を新古今集に撰ぶ際、改作を加えたためである。このような表現の違いは、表現に対する姿勢の違いであり美意識の違いといっていよい。特に「降りける」と「降りつつ」の差は顕著である。改作によって係り結びが排され、余韻のある流麗な韻律となった。それだけでなく、万葉集が、富士山に真っ白に雪が積もっていたという事実を歌うのに対し、新古今集は今まさに山頂に雪が降り積もりつつあると歌っている。海岸から山頂まで視点が移動するような空想的感覚である。つまり、赤人は単純明快にその感動を描き、定家は虚構であることを自覚しながら空想の世界に遊ぼうとしている。このように、これら二首は、比較することでその特長が際立ってくる短歌であり、いくつかの表現を視野に入れながら読みを構築していく力を鍛えるために格好の教材であると考えられる。

③二つの短歌の表現の違いを根拠にしながら、それぞれの短歌の特長を説明させたい。

比較という手段は、筋道の立った論理を展開する上で有効である。表現に向き合い、それらを比較することによって、生徒たちに自分の感じ方やとらえ方の根拠を明確にしていく力を身につけてほしいと願う。本時の授業では、繰り返し音読をさせて二首の短歌の韻律になじませた後、二つの短歌の表現の違いに注目させる。生徒たちは、「田子の浦ゆ」と「田子の浦に」、「降りける」と「降りつつ」など、いくつかの表現の違いとともに意味が異なっていることに気づくだろう。二つの短歌の違いが明確になったところで、「どちらの短歌が好きか」と問う。生徒たちは自分が好きな短歌とその根拠について表現を比較しながら考えるだろう。その過程で短歌の内容とそれぞれの特長を明らかにしていきたい。特に、「降りける」と「降りつつ」を中心として、韻律と描かれた情景について比較させるなかで、自分の読みを表現を根拠にしながら構築していく力を鍛えたいと考えている。

(3) 単元目標

- 二首の短歌を比較し、韻律や描かれた情景の違いに気づく。
- 表現の違いを根拠にすることで、それぞれの短歌の特長を説明する。

(4) 指導計画 (全6時間)

- ①古典短歌と出会い、古典短歌に関する基礎的な知識を得る。…………… 1時間
- ②「君待つと一万葉・古今・新古今一」の和歌を鑑賞する。…… 5時間 (本時 2 / 5)

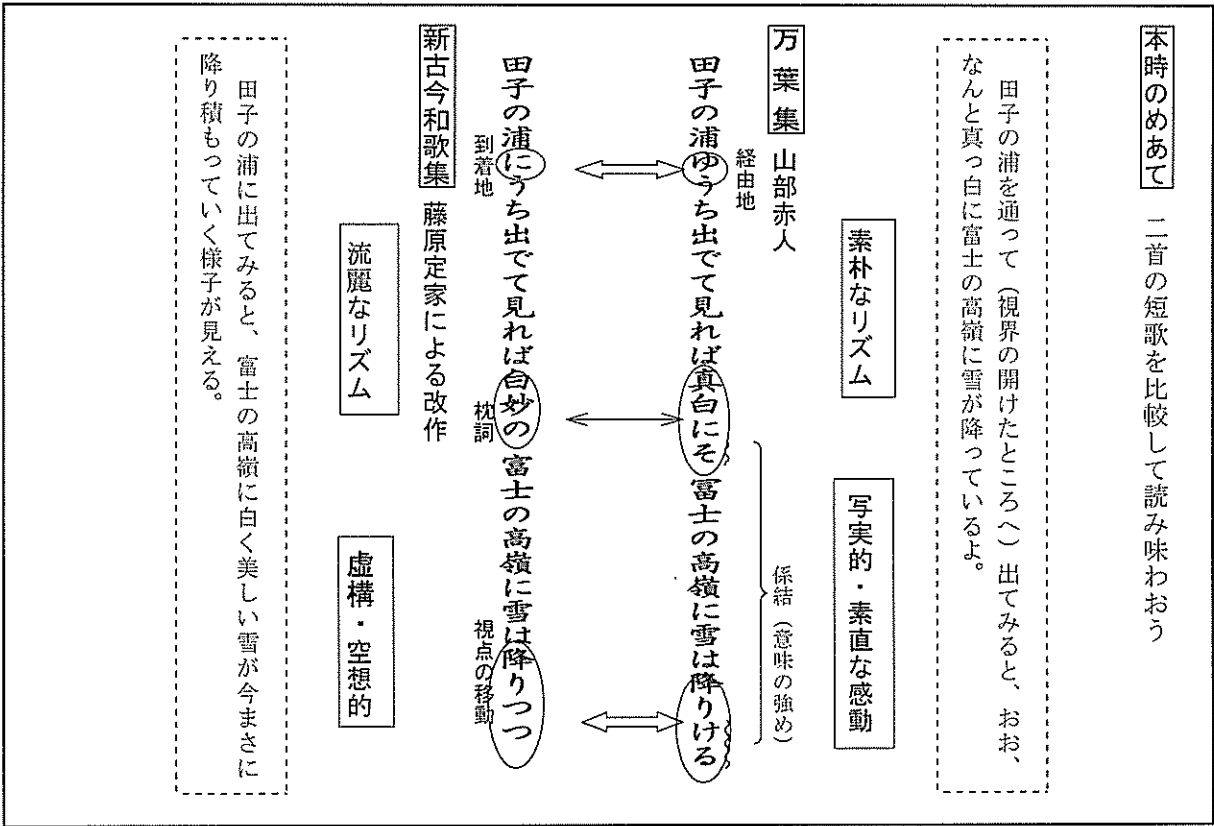
(5) 本時案

- ①主眼 二首の短歌を比較し、韻律や描かれた情景の違いについて考える活動を通して、それぞれの短歌の特長を説明することができる。
- ②準備 ワークシート
- ③学習の展開

学習活動・学習内容	指導上の留意点
①本時の学習内容を確認する。	①万葉集と新古今集によく似た短歌があることを告げる。 ・本時のめあてを提示する。
【本時のめあて】二首の短歌を比較して読み味わおう。	
②二首の短歌と出会う。	②短歌と口語訳の書かれたワークシートを配布する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・新古今集の短歌は藤原定家によって改作されたものであることを告げる。 ・二首の短歌を繰り返し音読させる。
【発問1】 二つの短歌では、どこがどのように違っているか。	
③二つの短歌を比較して、異なる表現に注目して意味の違いを考える。	③異なっている表現を探して発表させる。 ・表現の違いと意味の違いについて考えさせる。
【発問2】 自分が好きな短歌を選び、その理由を説明しよう。	
④二つの短歌のうち、自分が好きな短歌を選び、その根拠を表現から説明する。	④どちらの短歌が好きかについて立場を取らせた後、自分がそう感じた理由について考えさせ発表させる。 ・「事実」と「虚構」に注目して考えさせる。
⑤本時の学習のまとめをする。	⑤ワークシートに本時の感想を記入させる。

(6) 板書計画



3 考察

指導案でも触れているが、本時の授業には大きく二つのねらいがあった。

第一は「言葉の力」を鍛えるという、国語科としてのねらいである。二つの短歌において異なっているいくつかの表現を比較し、それぞれの短歌の「よさ」がどのように変わるのかに気づかせ、自分の読みを表現を根拠にしながら構築していくことで、生徒一人一人の「言葉をとらえる感覚や能力」を鍛えることある。これは、単に「何が書かれているか」(言語内容)ということだけではなく、「どのように書かれているか」(言語内容)を問題にするということである。

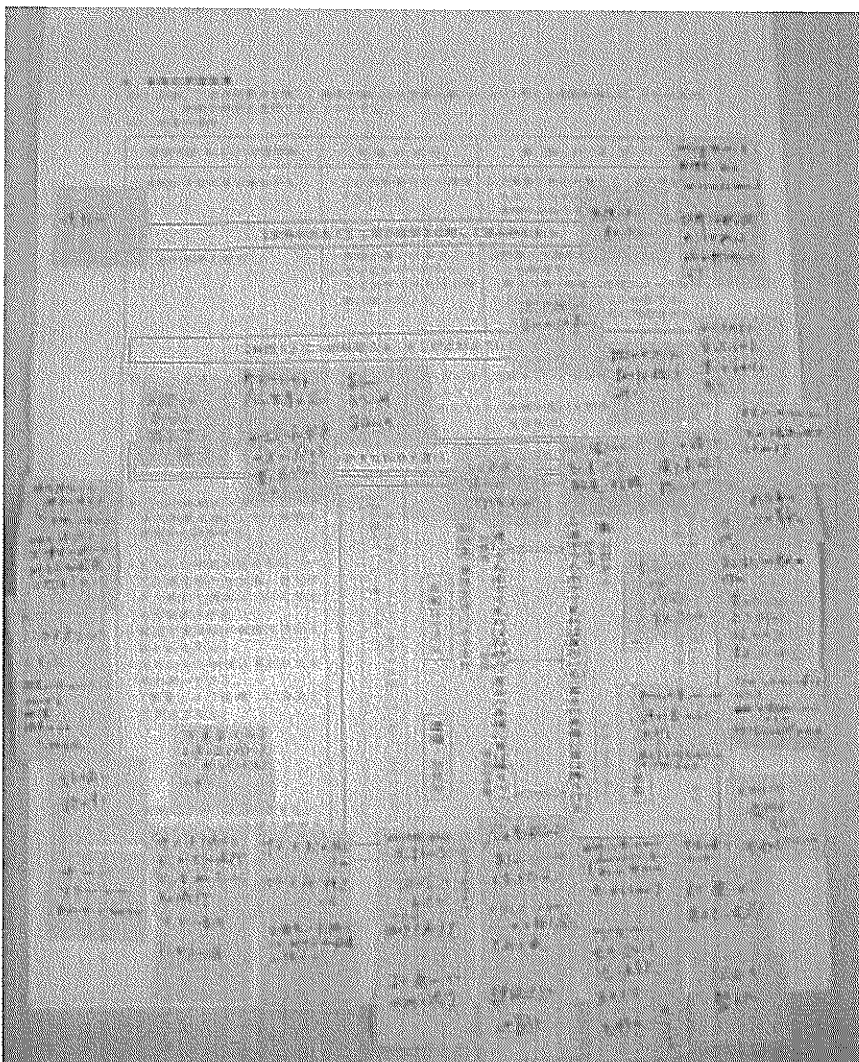
第二は、「根拠をもって筋道を立てて説明する力」を鍛えるというねらいである。これも「言葉の力」を鍛えるねらいと言えるが、国語科ならではのねらいというよりも、どの教科の授業においても鍛えることのできるねらいであるという点では、第一のねらいと異なっているといえる。

今回の授業を通して、これら二つのねらいについては概ね達成することができたのではないかと考えている。まず、第一のねらいについては、口語訳を中心とした言語内容の理解を土台としながらも、意味の違いだけではなく韻律の違いにまで目を向けて二つの短歌のよさがどのように違うのかを説明しようとしていた生徒が多くいた。このことから「比較する」という手法が、言語形式に関わって「言葉をとらえる感覚や能力」を鍛えるために有効であるということが確認できた。



また、授業全体を通じて、「自分の考えを仲間に分かってほしい。」という意欲をもって説明しようとしていた生徒も多かったことから、「根拠をもって筋道を立てて説明する力を鍛える」という、第二のねらいも達成できたのではないかと考えている。ある女子生徒は、授業後の感想の中に「今日の授業は、自分の意見をみんなに理解してもらえてよかった。」と書いている。このように、自分の中に「比べる思考」によって得られた根拠・筋道を持ち、それを説明したときに仲間が受け止めて納得をしてくれて嬉しかったという経験は、筋道を立てて説明する思考力や表現力を鍛えると同時に、その意欲を高める機会であったといえる。さらに、「言葉は伝わるのだ」という、言葉に対する信頼や希望を体験する機会でもあったのだとも思う。

授業後には、山口市・防府市を中心として約30名の先生方による研究協議が行われた。今回の研究協議は、右の写真のように本時の指導案を拡大したものに、それぞれの先生方が気づきを記入した付箋を貼付していくかたちのワークショップ型研修の手法で行った。参加者の先生方には、授業中の「教師の言葉」と「生徒の言葉」に注目して、それぞれ色を変えた付箋に授業中に気づきを記入してもらってから研究協議に参加していただいた。今回、このように視点を限定して授業参観をしていただいたことで、ワークショップ型研



修会での議論も焦点化されたものにする事ができた。教師の声かけのタイミングや発問の言い回し、また、授業規律を徹底させるための指示など、授業の基礎技術についての話題や、生徒のどの言葉をどのように解釈していくべきかという教師の反応解釈・反応組織に関わる質の高い議論が交わされ、実りの多い研修会とすることができた。